エッセイ　楽しい“虫音楽”の世界（その3　農業害虫の音楽）

昆虫芸術研究家
柏田　雄三（かしわだ　ゆうぞう）

農業に関連した音楽を紐解いてみる。農作業が歌われるヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）のオラトリオ≪四季≫，ガウチョの農作業など農場の一日を綴ったアルゼンチンの作曲家アルベルト・ヒナステラ（1916～1983）の≪エスタンシア（農場）≫を挙げたい。ほかにもシューベルトの歌曲≪収穫の歌≫シューマンのピアノ曲≪子供ためのアルバム≫から＜ぶどう狩りの時－喜びの時＞メンデルスゾーンの歌曲≪収穫の歌≫ヨハン・シュトラウス二世のワルツ≪収穫の踊り≫チャイコフスキーのピアノ曲≪四季≫の＜収穫＞シベリウスの≪テンペスト≫の＜収穫をする男たち＞等たくさんの曲がある。

農業機械の曲ではフランスの作曲家ダリウス・ミヨー（1892～1974）の≪農機具≫を聴く。フルート，クラリネット，ファゴット，ヴァイオリン等の伴奏による1～3分の6曲のユニークな歌曲で，農機具博覧会で見た＜草刈り機＞＜結束機＞＜条播種機＞等の名前が付けられた曲ではそれぞれの農機具の構造，用途，性能等が歌われる。

農業害虫の曲となるとどうだろうか。ドイツのアンドレアス・ヴィルシャー（1955～）のオルガン曲≪インセクタリウム≫中の＜コロラドハムシ（Kartoffelkäfer）＞では虫が葉をどんどん食べる様子が聴き取れる。

カントリーソングに範囲を広げると≪ワタミゾウムシ（Boll Weevil）≫がある。ワタミゾウムシ（ワタミハナゾウムシ）*Anthonomus grandis* は1892年にメキシコからアメリカに侵入したのち，あっという間に広がってアメリカ南部のワタ作を破滅させた大害虫である。この≪ワタミゾウムシ≫は本格的に農業害虫の怖さを歌った点で貴重な曲なのだ。

被害のひどさが「ワタミゾウムシが南からやってきて様々な環境を乗り越え最後には収穫物である綿の半分を持って行った。残りは商人が持ち去り，農夫の妻には穴だらけの古い綿のドレスがたったひとつ残っただけだ」とペーソスを交え歌われる。

バッタの名がついた曲はいくつもあるが，多くはぴょんぴょん跳ぶ姿を表しており，植物を食い荒らす様子を示したのは前に紹介した山田栄二の≪ファーブル昆虫記≫の第5曲＜バッタ＞ぐらいだろう。

2012年に亡くなった林光の歌曲≪この害虫（むし）だけは……≫。CDの解説書によると人形劇団結城座が1971年初演の『変化紙人形』への挿入歌だそうだ。歌詞は「日が暮れてしまっても，青い羽を震わせているこの害虫（むし）だけは殺せない」という内容の「この害虫」とは何なのだろう。作詞者の吉行理恵はこの世になく，楽譜からも劇団からも情報は得られなかった。私はオオミズアオを連想したのだがどうだろうか。

蚊や蚤等の衛生害虫の曲に比べて農業害虫を題材とした曲が少ないのは，生活と直接関与する衛生害虫と異なり，音楽家が自ら作物を栽培しそこで発生する害虫に注意を払う機会が乏しかったためではなかろうか。

江戸時代の儒学者江村北海の書物「虫諫（むしいさめ）」にダイコンの葉を虫が食べるのを諫める記述があるそうだ。「虫諫」の出版は1762年でモーツアルト生年の6年後に当たる。農業と関係なさそうな人物がこのようなことを書いていることからすると，クラシック音楽の作曲家にも私の知らない農業害虫の曲があるのかもしれない。

林光≪この害虫だけは……≫
ALM RECORDS/コジマ録音
ALCD-7025